

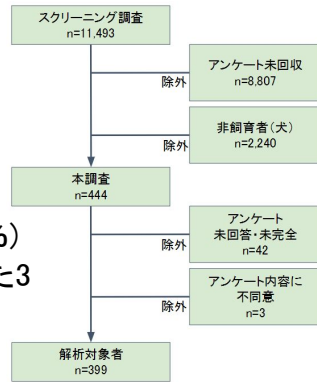
加藤真帆 程塚太一 石原淳子(疫学・公衆衛生学) 小手森綾香(食の情報・栄養疫学) 中舘美佐子(公衆栄養学) 久世明香(行動発達) 永澤美保(同調的共生) 菊水健史(社会内分泌) 茂木一孝(社会神経学)

研究の背景と目的

- ・ヒトの身体的な健康は運動で維持される(Booth et al,2012:Hills et al,2015)
- ・ペットがいると運動機会が増える(Christian et al,2013:Westgarth et al,2014)
- 次世代多目的コホート研究を用いて**ペット飼育と病気の発症の関連**を明らかにする
- 特に**犬への愛着度と身体活動の関連**を調べるため、
- これらを測定する質問票を作成,回答の分布を確認するパイロット調査を実施

研究・調査方法

・インターネット調査 (株式会社ジャストシステム Fastask)  
日本在住の30歳-74歳の男女計11,493人にスクリーニング調査を配信し、2,686人(23.4%)が回答した。うち犬の飼育者444人を対象に本調査を配信し、408人(91.9%)が回答した。うちアンケート内容に同意が得られなかった3人と回答が不完全だった3人を除いた399人の回答を調査に使用した。



結果と考察

表1.対象者特性表

性別	n	%	地域	n	%
男性	236	58.3	北海道	15	3.7
女性	169	41.7	東北	18	4.4
			関東	145	35.8
年齢			中部	70	17.3
30代	150	37	近畿	90	22.2
40代	102	25.2	中国	15	3.7
50代	74	18.3	四国	18	4.4
60代	67	16.5	九州	34	8.4
70代(～74)	12	3			
結婚			子ども		
未婚	109	27	有り	262	64.7
既婚	296	73	無し	143	35.3

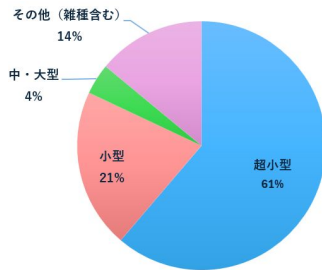
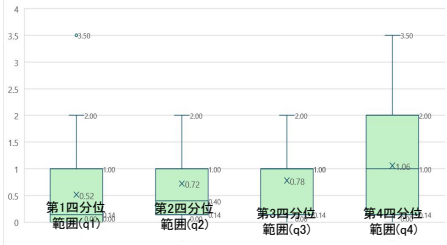


図1.回答者の飼育犬種の割合

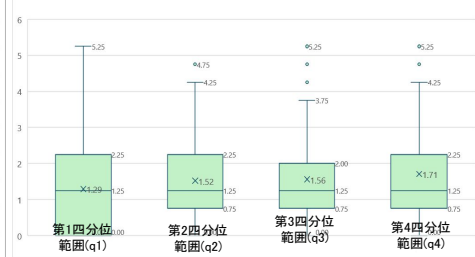
Lexington Attachment to Pets Scale, LAPS (レキシントン愛着度テスト)

- ・ペットへの愛着度を測る指標
- ・23個の質問を4段階のスコアで評価
- ・合計スコアが高いほど愛着度が高い
- ・解析ではスコアが低い順に四分位範囲で4群に分けた

散歩頻度(回/1日)



散歩距離(km/1日)



散歩時間(分/1日)

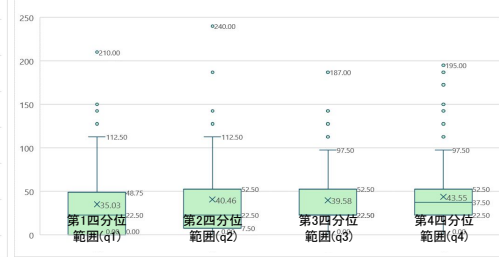


図2.LAPSごとの散歩頻度 距離 時間

平均が0.52回/日(q1)から1.06回/日(q4)と高くなった

平均1.5kmでLAPSの違いによる差は確認できなかった

平均40分前後でLAPSの違いによる差は確認できなかった

→散歩頻度のq4はばらつきも大きいため、有意に高いかどうかは今後検証が必要

散歩の距離、時間は愛着度によって変化せず、頻度は愛着度が高いほど増加した。距離、時間は犬種によって適切な量に差があり、今回の回答者の61%が超小型犬の飼育者であったため、距離、時間は愛着度が高くとも増加せず、頻度は犬種によらないため増加したのではないかと考えられる。

これから

作成した質問票を改良し、次世代多目的コホート研究(JPHC NEXT)の生活習慣に関するアンケートに回答した犬飼育者への追加のアンケート調査を行う。また、犬種による必要散歩量の違いなどを踏まえ、犬の飼育と飼い主の健康との関係を調査する。